
じいちゃんヒーロー

朝霧遊水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じいちゃんヒーロー

【Zコード】

Z6917A

【作者名】

朝霧遊水

【あらすじ】

僕のじいちゃんが学校に現れたとき、平穏は崩れ去る。今日もこの町内の平和を守れるのだろうか……？

特撮ヒーロー番組を見たことがあるだろ？

かつこいい必殺技、巨大な悪と戦う勇敢な主人公。

しかし実際のヒーローはそんなにかつこ良くないかも知れない。

僕の名前は山崎真人。ごくごく普通の小学5年生のツッコミ系少年だ。

とりあえず言つておくが、僕は今5年3組の教室の自分の席に座つて授業を受けている。

「はあ、なんか面白いことおこんねえかな」

僕の友達兼に荷物持ち君の裕也が耳打ちする。

「たしかに」

僕もそれに頷く。

担任は国語の朗読をしている。単調な音に思わずあぐびが出てしまう。しようがない。つまらないのだ、暇なのだ。他の生徒にもしても、授業を聞いているのは真面目な一部の生徒のみで、後は内職するか寝るか、僕たちのように話しているかだ。

「ふあ……」

僕はあぐびをした。まぶたも重くなっている。眠い。ああ、上瞼公爵と下瞼令嬢が今にも駆け落ちしそうな勢いで逢引したがっている。

仲人は睡魔さんだ。ここは僕も一人の愛を応援して、くつづけてやるべきだろう。

僕は夢の国に行くために着々と準備をする。主に担任に見つかれないようにする工作だ。やはり旅立つ時にはそれなりの準備が必要だよ、うん。備えあれば憂いなし。

「まあとおー」

どこからかかすかにじいちゃんの声が聞こえた。恐らく幻聴か夢の国からの招待状だろう。このじいちゃんは時間は家にいるはずだ。といふか家にいる。

「まあとおーましゃとおー？ Masato？」

そつ夢だ夢。夢に決まっている。今、発音が英国人風だったのも気のせいだ。

すると唐突にガラツつという音がした。僕はいきなり現実に引き戻されて目を瞬かせながら音源を見た。
そこにはしわしわよぼよぼ、鳥の足に似た骨と皮だけのような老人一名。息が上がっていて、今にも倒れそうだ。

「じいちゃんつーじうしたんだよ、こんな退屈でつまらないところに……」

おっと、思わず正直に思いのたけを言ってしまった。まあ、担任驚いて聞いてないみたいだから問題なしか。

「お、おお真人。や、やつと見つけた。ちよ、ちよつと話が、あ、あるんじゃが。」

じいちゃんは息も切れ切れになりながら答えた。やばい、発作が起ころるかもしれない。じいちゃんは持病で発作がある。

「先生。じいちゃんを保健室に連れて行きます
「早く連れて行つてあげなさい」

先生は突然のことに少し混乱してこちらを見つめたが、しつかりとそう言つた。

僕はじいちゃんを保健室に連れて行つた。保健室の先生は居ないが勝手に入らせてもらつ。

「じいちゃん、はい。水だよ」

僕はコップに水を入れてじいちゃんに渡した。どこかに麦茶だとかいう気の利いたものもあるはずだが、まあ、別に良いだろ。じいちゃんはそれを受け取る。そして腰に左手を当てて水を飲む。

「くう~、まずい。もう一杯」

なつかしのフレーズだ。しかし、いまさらそれはないだろ。僕は軽く流すことにする。

「で、じいちゃん。何の用?わざわざ学校まで不法侵入しに来て?」
「やつじや。実はなあ、怪人が現れたんじや!」

は?といふかそんなことを言つてじいちゃんが一番怪しいぞ?

「じいちゃん、大丈夫?熱計りつか?とつとつ頭がイカれた?」

僕はじいちゃんを揺さぶりながら言つた。じいちゃんはがくがく揺
れている。

「ぐくぐくしじぞい……」

このままでは、逝つてしまいそうだ。そう判断して僕は手を離した。
じいちゃんはゲホゲホとせきをしている。心なしか顔も青ざめて見
える。まあ、気のせいだろう。案外じいちゃんはしぶといと僕は信
じていたい。

「真人。わしは今、ばあさんが川の向こうで手を振つているのが見
えたぞ」
「だ、大丈夫?」

ちなみにばあちゃんは生きている。むしろじいちゃんより元気だ。

「でさ、結局何なの?」

「あのなあ、ベルトがイケメンじゃから怪人が死にそうで、わしは
ヒーローを倒さなければいけないのじゃ。」

病院はどこだつたかな?

「じいちゃん。もう一回言つて。」

「だから、イケメンの怪人がベルトじゃから、ヒーローがピンチで、

わしは……あれ？なんじゃったかな？？」

しかもせつと違つてゐじ。

「じーちゃん。はー、ゆっくり息を吸つて。吐いて。吸つて。吐いて。」

「すつ、すつ、はあー。すつ、すつ、はあー。…そづじゅー…わしがスキップしながら散歩しているトイケメンのヒーローと怪人がいてな、ヒーローが死に掛けていてわしは、ヒーローからベルトを託されたんじや！」

とにかくその呼吸法はラマーズ呼吸法だ。出産の時の奴だ。

「じーちゃん、とつあえず病院に行つつか？」

「おひょ？わし悪いくじうなんてビコもないぞ？」

自覚はないもんなんだね。

僕は憐れそうな瞳でじーちゃんを見る。大体、スキップで散歩するのはやめていただきたい。田の毒だ。

「まづ学校でようか？」

これ以上学校にいても暇だし…。と心の中で呟く。まあいわゆるサボりだ。しかじじいちゃんを口實にすれば先生も文句も言えないだろう。それに僕は先生受けいいし。

「じーちゃん」で待つてて。「

教室に荷物を取りに僕は走った。

ガラガラガラ…

教室のドアを開くとドアを開いた人物、すなわち僕に視線が集まる。

「山崎君。おじこちゃんはどうしました?」

水を打つたように静かだった教室に、先生の声が響く。

「どうやら、誤って学校に迷い込んだらしいです。痴呆が進んでますから。あと発作が起こりそうなんで早退していいですか?」

「分かりました…。おじこちゃんについてあげなさい」

「ありがとうございます」

僕はお辞儀をする。ふつ、ちょろいな。
手っ取り早く荷物を纏める。

「……お前、基本腹黒いよな」

「おや、裕也君?」こんなに祖父思いの僕のどこが黒いといつかね?

「い、いや。うん、お前は良いやつだ」

物分りの良い奴は長生きするよ、裕也。

「……総合病院へ行くべきか？それとも精神科医か？」

「真人どこが悪いのか？じいちゃんがおんぶしてやるうつが？」

じいちゃんの言葉はスルー。それに僕がじいちゃんにおぶられたらじこひゃん潰されると思つ。

「天国のばあさんや。真人がシカトするんじや……」

だからばあちゃん死んでないって。というかじいちゃんがばあちゃんに殺されるよ？

「はいはい。じいちゃんちょっと付いてきてね？」

「はつ、これが噂の唐揚げかいのつ！？」

何を想像しているんだ。というかかつあげだ。じいちゃんなんて食べたくない。それに家族からかつあげしても無駄だろ？

僕が嘆息交じりに考えていると視界の端にちらちらと何かが映る。ふと気を引かれてそちらに顔を向けるとそこに居たのは変質者だった。この暑い日に長袖長ズボン。黒いマントを羽織つていて、何故か口に真紅の薔薇をくわえている。そして5人ほど全身タイツの変態を引き連れていた。

コスプレイヤー？

「じいちゃん、別の道行こつか

出来るだけ係わり合いになりたくない人種だろ？何故か物凄く熱っぽい瞳でこっちを見てきているが。

「フンッ、逃げるのかい？」

真ん中の変態のボスみたいなのが僕たちを見て嘲笑する。いや、誰だってそんな格好をしている人からは逃げたくなりますって。僕はじいちゃんの手を引いてその言葉を無視して踵を返そつとする。

「……真人、男には逃げてはならんときがあるんだじやん……？」

しかし、じいちゃんは立ち止まった。その瞳には決意の光が宿つていて。

「おやあ、僕に敵つと思つてこるのかい？」

「ああ、やつてみせるんだじやん……わしね……ヒーローじゃからなつたのだろうか、不快そうに眉をひそめる。

変態ボスはじいちゃんを挑発するように笑う。しかし、じいちゃんはそれに去まらず変態と向き合つた。変態ボスはその態度が気に障つたのだろうか、不快そうに眉をひそめる。

「ヒーローへはつ、ビゴがヒーローだつて？」

悪いが同感である。じいちゃん、寝言は寝て言おう。

「後悔するんじやないぞー変身……とつ……」

じいちゃんがわざと腰のベルトに手を当てる。正直趣味が悪い、子供のおもちゃの変身ベルトみたいな奴だ。それはじいちゃんが手をかざすと、田もくらむような眩い光を放つ。

「な、何だつて！？お前がまさか本当に……－？」

変態ボスはその光景を見てうろたえた。下つ端らしき全身タイツにいたつては既に浮き足立つていて。

「じ、じいちゃん……」

「真人、言つたじやうづ。わしは今日から一ロードになつたんじや……！」

「……！」

眩い光の中でじいちゃんが微笑む。……のは良いが。

「じいちゃん光つてるだけで何も変化ないからー。」

「今のうちだ！お前ら行けつ！！」

「キキッ！」

あ、全身タイツは下つ端的叫び声だ。

「ちょ、ちょっと待つてくれー変身中は手を出さないのが暗黙の了解じやうづ！？」

そんな常識はないだろ？、じいちゃん！？

「むつ……それもそうだが……」

納得するのかよ。全身タイツも立ち止まる。

「そつじやよ！わしは真人の大好きじやつた戦隊物を昔からよく見て研究してたんじや！……こつそり玩具の剣とかベルトも借りてたん

「じゃーーー！」

「お気に入りだった玩具が知らないうちに壊れてたり、障子が破れて怒られたのはじいちゃんのせいかーーー？おいつ！」

がくがく揺らす。敵だと思われる変態ズが引くぐらいがくがく揺らす。

「あ、あの…………そろそろやめないと死にますよ？」

「一度死んで変な行動と言動を取らなくなるならむしろ良いつ！」「いやいやつー？死んだら生き返りませんつてー！」

全身タイツは案外良識人だった。といつか普通に日本語しゃべれるんだ。

「こりつー！普通に喋つたら給料引くぞーーー！」

「そ、そんな殺生な…………最近子供も産まれたんで入用なんですつてーーー！」

しかも所帯持ちだった。

「げほつーーー」ほつ、げほつげほつ…………

あ、じいちゃんを忘れてた。

「ちよつ、大丈夫ですか？」

「じ、持病の喘息じや…………」

「ええつー？病院行きましょうよーー？ってかそんな貧弱なヒーロー聞いたことありませんってーーー！」

しかも全身タイツは自分もお金ないのに気遣うくらい良い人だった。

「わ、わしは負けられんのじゃー。」

じこかやんは氣力で起き上がる。

「……行けー。」

変態ボスも乗せられて指示をする。全身タイツは一瞬躊躇つた後、じこかやんに向かつて走る。

「……すみません。だが、これも可愛い裕香のためっー。」

娘さんは裕香ちやんといつらしこ。

全身タイツの所持持ちの裕香ちやんのお父さんは、じこかやんに右拳を振り上げる。

「じこかやー。」

「げほおつー。」

「ええつー。当ててないですよー。つい、何でその非難の田ー?。」

裕香ちやんのお父さんは物凄く周りから睨まれた。しようがない、じこかやんが凄い顔上げで、しんどそうだから。

「……老人虐待!そんなことで裕香ちやんが喜ぶと思つてこりのかー!。」

「はつ、ゆ、裕香ああああつ……ー。」

全身タイツ一人脱落。頑張れ、裕香ちやんのお父さん。

「ちーつー。お前らも行けー!」

「「」ほつー・げほつ……！」

変態ボスは苛々と靴を鳴らす。しかしじーちゃんのせきこみで全員一瞬躊躇つた。

そのとき僕は見た。じーちゃんの瞳が一瞬輝くのを。

「秘儀ー・3日間履いた靴下+男物の下着ーー！」

シユパパパツーーとじーちゃんは靴下と下着を全身タイツの口や鼻に当たるだらう部分に投げていく。むわわあん……と称するようななんともいえないすっぱいような匂いがする物をだ。あれは……きつい。

「む、無念……！」

残りの4人いた全身タイツはあつさりとじーちゃんの靴下と下着に負けた。僕も心が折れそうな光景である。

「き、貴様……卑怯だぞ！」

「6対1で襲つてくるよつた奴に言われたくはないわいーーどちらかとこつと戦術じゃーー！」

それにもしても酷い奇襲だ。喘息に見せかけて攻撃つて。

「しょうがない。僕がじきじきに葬つてくれるー！」

変態ボスはぱつとマントを翻す。じーちゃんもふつと表情を消して構えを取る。痛いほどの大沈黙が降つた。何が痛いかといふとこの光景 자체が痛いのだが。

「行くぞ……！」

「バツチ恋！」

じこちゃんその年で恋とか言つのは止めよ。しかも変だから。

「はあつー！」

今氣付いたが、変態ボスは銃刀法を軽く無視していた。細身の剣がじいちゃんの服をかする。

これは本当にヤバイかもしれない。

「じいちゃんー！」

「真人安心しろーじいちゃんには……一日に一度しか使えんが……ひっしゃつ技があるんじゃーーー！」

今噛んだよね？重要な場面で噛んだよね？しかもそれを流そうとしているよね？

「フンッ、やつてみなよー！」

変態ボスは鼻で笑つて再び剣を構える。じこちゃんは一つ大きく息を吸つて、そして……

「入歯クラッシャーー！」

入歯を吐いた。入歯は放物線を描かず、一直線に変態ボスに向かつ。ボスは真っ青になる。

「あー汚いつー！」

そう叫んだ変態バスの口に入歯がカポリとせまつた。ジャストミートだ。

「『」「こんな』ことがある……なんて……」

変態バスは地面に倒れこむ。

「ひょうか、ひょもひひつひやか（びつだ、思い知ったか）」

ちやんと発音でもしないよ。

「くいらせはななふはふんひや（正義は必ず勝つんじや）」

果たしてどつちが正義だったのは怪しこほぞ、汚い勝ち方だったが。色々な意味で。

「うしごじ町内の平和は守られた。僕の気力の減少と裕香ちゃんのお父さんの就職を失うところ多大なる被害を与えながらも……

僕のじいちゃん。72歳。喘息と認知症持ち。そして自称ヒーロー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6917a/>

じいちゃんヒーロー

2010年10月11日19時05分発行